

ナラティブにおける対人関係の複層性と連続性

—方言調査の録音データを用いて—

脇 忠 幸

1. 問題の所在

「ナラティブ (narrative)」とは、会話中に登場する「物語」「物語る行為」のことであり、「昔話」「病い (illness) の語り」「昨日の飲み会の話」など幅広い現象をカバーする日常的な行為の一つである¹⁾。たとえば「昔話」には、「昔話らしい語り方」が存在する。「昔々あるところに…」で始まり、落ち着いた静かなトーンとゆっくりとしたスピードで語りが進行していく。こうした言語形式や構造、あるいはパラ言語は、「いま・ここ」での発話が「昔話」であることを示す重要な「演出」である。「あの時・あそこ」での出来事を「いま・ここ」に再現するための手続きという見方もできるだろう。これらの手続きにはどのようなものがあり、どのように実践されているのか、そして「語る」ことで私たちは何をしているのか、ということがナラティブ研究の大きな焦点である。

「病いの語り」「ライフストーリー」「ナラティブ・アプローチ」など様々な研究領域でくり返し指摘されたのは、ナラティブ≠事実の報告、ということである (クラインマン 1988、桜井2002、野口編2009)。ナラティブで語られることは、語り手にとっての主観的な「事実」「経験」であって、必ずしも客観的な事実とは限らない。すなわち、「あの時・あそこ」での出来事は、ナラティブを通して常に「いま・ここ」で (再) 構築されるのである。先に述べた「演出」は、その構築方法に他ならない。その方法のいくつかについてはすでに指摘されており、指示詞や終助詞、テンス・アスペクト、引用、視点移動などが挙げられる (松木1999、砂川2003)。

指示詞や終助詞などの文法カテゴリーを「方法」や「手続き」と捉える認識には異論もあるだろう。ここで改めて強調しておきたいのは、ナラティブ研究は言語学の域を超えているということである。

そもそも、言語学におけるナラティブ研究は、Labov (1972) に端を発する。Labov以降、言語学においては構造分析を中心に研究が進められ、有益な研究結果が蓄積されてきた。それによって、ナラティブがどのような構造を持つのかという点は十分に解明されたと考えてよいだろう。しかし、いくら構造分析をしたところで、私たちにとってナラティブがどのような機能をもつ事象なのかはわからない。単純な構造分析から一歩踏み出した研究 (たとえばハリデー&ハサン1976、Shiffrin1987) も存在するが、結局のところそれらも構

造という観点から抜け出すことはできていない。

「物語る欲望に取り憑かれた存在」(野家2005)とまで言われる私たちは、ナラティブを通して一体何を行っているのだろうか。それを明らかにするためには、従来の言語学の枠を超えて、言語をコミュニケーションにおける一つの資源として捉えることが必要なのである。近年、言語学領域においてもナラティブをコミュニケーションの中で捉える動きが出てきたが(たとえば佐藤・秦編2013)、その研究は端緒についたばかりであり、まだ追究が不十分と言わざるを得ない。

2. 目的と方法

本稿で扱うのは、「具体的な出来事や経験を順序立てて物語ったもの」すなわち「経験語り」としてのナラティブであり、人々の「物語る」という行為に焦点を当てる。ナラティブを通して参与者間の関係がどのように変容していくのか、その過程の記述を目的とする。もう少し詳細な説明をすれば、以下の通りである。

目的①過去の「再現」を可能にする過程の解明

現在(「いま・ここ」)において過去の経験(「あの時・あそこ」)を語る時、それは主観的な再構築を意味する。時間軸の往還を可能にし、「再現」を成立させる言語的要素がどのように用いられているかを明らかにしたい。

目的②参与者間の複層的で連続的な関係性の記述

後述するように、本稿で対象とするデータは、かつて筆者が参加した方言調査の調査場面である。当初築かれた【調査者-インフォーマント】という二人の関係は、インフォーマントの経験語りを通してどのように変容していくのだろうか。おそらくそれは、明確かつ完全に切り替わるものではない。対人関係/コミュニケーションの複層的で連続的な側面を詳細に記述することで、その内実に迫りたい。

このような、ナラティブに対する質的で詳細な記述研究は、管見の限り言語学では例がない。同様の研究は社会学(ライフストーリー研究や会話分析など)によって先鞭がつけられており、本稿においても社会学(会話分析)による一連の概念と手法が有効だと考える。しかし、会話分析も後述するような限界を抱えており、本稿にはその超克という目的も含まれている。

会話分析では、当該の発話がどのような機能を持ち、どのような行為として認定されるのかは会話の連鎖の中で決められていくものとされる。しかも、それらの機能や行為は確定することがなく、常に変容する可能性を秘めている。言語学(語用論)では、こうした「ど

のように」言うか、についてうまく言及できない。コミュニケーションの刻一刻と移り変わる動的な側面は、言語学だけでは手に負えないのである。

一方で、会話分析だけでは、なぜその言語形式を用いたのかについて解明できない。たとえば、終助詞「よ」と「ね」の使い分けが説明できないのである。その点、語用論を用いれば、状況によって「何を」言うのかという分析をすることができる。

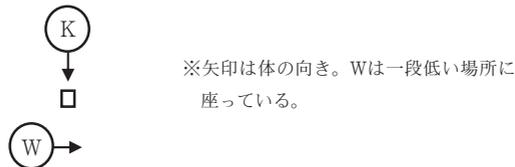
そこで本稿では、語用論と会話分析を組み合わせることで、「何を」「どのように」言うかを詳細に記述・分析する²⁾。

3. 用いるデータとトランスクリプトの記号

本稿では、かつて筆者が参加した方言調査の録音データを用いる。調査は2005年8月に山口県大島郡周防大島町沖家室島で行われた。調査者は筆者自身（以下、W）であり、インフォーマントは当時84歳の男性Kさんであった。調査参加者には担当が割り振られており（筆者は「漁業語彙」担当）、それぞれの調査簿にもとづいた半構造化インタビューによって調査は行われた。こうして得られたKさんとの会話音声データの総録音時間は、約213分。このうち本稿で主に対象とするのは、調査開始からおよそ36分が経過した後の約12分間である。

分析する立場の者が参与者の一人として加わっていることは、通常何らかのバイアス（意図的な誘導など）が危惧されよう。しかし、録音時の目的は方言調査であり、音声データをナラティブ研究に用いる予定はまったくなかった。質問－応答連鎖がデザインされた、ありふれた方言調査であったことも併せて考慮すると、ナラティブの生成過程に対するバイアスは特に無いものとする。

なお、録音時の会話参与者の位置関係は以下のとおりである。Kさんの自宅（土間）にて、Wがやや半身になった状態で行われた。二人の間には録音のためのICレコーダー（下図中央の四角部分）が置かれている。



トランスクリプションのための記号（西阪2001、串田2006）

- [] 複数の参与者の発話が重なっている部分を示す。
- [[] 発話の重なりが前後に連続して生起する場合、それぞれの発話と重なっているかを示すために二重の角括弧も用いられる。
- = 異なる話し手の2つの発話が途切れなく続いていることを示す。

(数字) 丸括弧の数値は、その位置にその秒数の間合いがあることを示す。0.2秒単位で示される。

(.) 0.2秒より短い間合いを示す。

： 直前の音が延ばされていることを示す。コロンの数は引き延ばしの相対的な長さに対応している。この時、コロンは有標化された引き延ばしを示す。

・ 直前部分が下降調の抑揚で発話されていることを示す。

? 直前部分が上昇調の抑揚で発話されていることを示す。

文字 下線部分が強調されて発話されている（例：音量が大きい、音が高い）ことを示す。強調の度合いがさらに強い場合は、二重下線を用いる。

°文字° この記号で囲まれた部分が弱められている（例：音量が小さい、音が低い）ことを示す。

h h 呼気音を示す。hの数はそれぞれの音の相対的な長さに対応している。この記号は「ため息」「笑い」などいくつかの種類の異なるふるまいを示す。

文(h)字(h) 呼気音が言葉に重ねられていることを示す。「笑い」ながら発話をした場合などに用いられる。

.hh ドットに先立たれたhは吸気音を示す。hの数はそれぞれの音の相対的な長さに対応している。この記号は「息継ぎ」「笑い」などいくつかの種類の異なるふるまいを示す。

< > 前後に比べて発話のスピードが遅くなっている部分を示す。

(文字) 聞き取りに確信が持てない部分を示す。

() 全く聞き取れない部分を示す。発話の長さは空白の長さに対応している。

[] 発話者が誰かの発話や思念を直接話法で引用していると見なせる部分を示す。

→ 分析において注目する行を示す。

4. 分析と考察

本稿で取り上げる会話の直前まで調査簿に沿った質問-応答が続き、順調に調査は進んでいた。この間、質問-応答連鎖は「インタビュー調査らしさ」を生み出し、参与者間(WとK)に【調査者-インフォーマント】という関係性を作りだすことに貢献している。ところが、調査開始から約36分たったところ状況が一変する。インフォーマントであったKが「僕なんぼに見えます?」と突然Wに尋ねたのである。この質問-応答の逆転をきっかけにして話題は変わり、それまでの順調な調査から逸脱していく。インフォーマントが発言権(floor)を握ったことで【調査者-インフォーマント】という二人の関係性に変化が起き始めるのである。

分析の対象とするのは、この逸脱の冒頭から約12分間である。この約12分間のナラティブは、いくつかの小さな物語で構成されている。「鉄砲の話」(29K~68W)、「通信士としての日常」(152K~167K)、「訓練と銃剣の話」(186K~231W)といった物語が折り重なって、一つの「戦争体験」ナラティブが構築されていく。

4.1 関係性の〈融解〉

「あ(.)h鉄砲の話じゃが。」(29K)で始まるこのナラティブは、直前に語られた戦闘につ

いての話題から派生したものである。

(1) 【非経験者－経験者】(W-K)

30K: 鉄砲の音で.

31W: うん.

(2.0)

→32K: 遠くにおる(.)敵がおる近くにおるっちゅうことがわかるわけ.

33W: う:ん.

→34K: わかる?

→35W: さすがにそれはわかんないですよ.hhhな何となくこう

(0.6)

36W: その音の大きさってことなんですか?

37K: ん音がね?

38W: はい.

→39K: ピャッ(.)ちいうた場合は(.)近いわ°けよ°

Kは「わかるわけ。」(32K)、「近いわ°けよ°」(39K)と、説明のモダリティ「わけ」(日本語記述文法研究会編2003)を用いることで、Wに鉄砲の音と距離の関連性について説明を試みる。しかし、当時26歳のWがこの関連性を即座に理解できるとは思えない。なぜなら、Kの話は経験者でなければ理解できないことだからだ。「さすがにそれはわかんないですよ.hhh」(35W)という笑い混じりの回答は、Wが自らを「非経験者」としてカテゴリー化する行為であり、同時にそれは目の前のKを「経験者」としてカテゴリー化する。Wの発話だけでなく、Kの「わかる?」(34K)という直接的な確認や、「考えたこともないでしょ。」(46K)という発話も、経験の有無を顕在化させ、【調査者－インフォーマント】から【非経験者－経験者】への関係性の変容を促している。

もちろんこのときの「非経験者」はWを指すのだが、実はこの時点までに、もう一人の「非経験者」が登場している。それは、データ冒頭での「越中富山の薬売り」(13K)である。

(2) 【非経験者－経験者】(薬売り-K)

12K: だから(.)よく(.)あの

(2.2)

13K: 薬を(売る)あそこの(.)富山のえ(.)え越中富山の薬売り[()](.)や
ら他の人が来てから(.)軍隊の話を(.)聞かせてくださいっちて°いうて°

14W:

[はい]

15W: う:ん. =

→16K: =聞かせてもあんたほんとにせんでしょうがっ (つって)

17W: う:ん.

(1.4)

→18K: したことがないでしょうが.

(1.6)

Kによると、かつて、薬売りがKの戦争体験を聞かせてほしいと訪ねてきたらしい。しかし、Kはその依頼を断ったという。その理由として、「聞かせてもあんたほんとにせんでしょうがっ (つって)」(16K)、「したことがないでしょうが。」(18K) という「戦争経験の有無」を挙げる。つまりKは、自分と「ほんとにせん」「したことがない」人(薬売り)との間に、経験の有無による理解不可能性を見出している。薬売りが「非経験者」「Kを理解できない者」へカテゴリー化される一方で、このときはまだWとKの関係は【調査者-インフォーマント】に留まっている。両者の間で「戦争経験の有無」が顕在化するの、もう少しあとになってからである。ここでは薬売りがソト(あちら)に置かれることで、相対的にWとKはウチ(こちら)となり、緩やかな成員性が発生したと考えられる。

前述したように、その後の(1)ではWも薬売りと同じ「非経験者」カテゴリーに入ってしまう。緩やかな成員性のもとで順調に進んでいたインタビューは、その性質を変え始めたのである。薬売りの時ほど理解不可能性は顕在化していないが、KとWの関係性は非対称的なものへと変化していく。ある出来事を直接目撃した者はそれについて物語る権限(entitlement)を持つとされる(Sacks1992)。すなわち、経験の有無に関する語りは、非対称性の発生を意味するのである。

物語る権限は、同時に理解の表示へ制限を生み出すと考えられる。たとえば次のような光景は、この権限と制限によって生み出されたものだろう。

ある人(Aさんとしよう)がもう一人の人(Bさんとしよう)に自分の悩みか何かを相談していたのだが、聞き手のBさんが「そう、わかるわかる」とうなずいていたら、Aさんが突然話を止めて怒ったように「そんなに簡単にわかるわかるなんて言ってほしくない」と呼びはじめた。(略) Aさんは、「私がいいと納得するまでは、私のことを『わかる』なんて軽々しく言ってほしくない」という。(菅野2003, p.127)

語り手はもちろん、聞き手も、語られる経験にアクセスすることはできる。しかし、聞き手のアクセスには語り手の承認が必要となる。しかし、会話における承認は、常に事後承認であり続ける。聞き手にとっては、自分の行為が承認を得られるものかどうかは「賭け」(ゴフマン1959)である。菅野の例におけるBさんのように、あるいは富山の薬売りのように、いつ状況が変わるのかは誰にもわからない。「非経験者」となり、その制限を受け

ることになったWは、その後の会話においてあいづちを返す程度の行為に終始することになる。

非対称的な【非経験者－経験者】へと変容した関係性は、これ以降さらに展開を見せる。鉄砲の話のあと(69K～)、Kは自分が「電報班」(71K)に所属する「暗号士」(73K)であったと語り始める。その語りを通して、今度は両者の間に「知識の有無」が顕在化してくる。

(3) 【知識を持たない者－知識を持つ者】

77K: °たたとえばよ?°

(0.8)

→78K: 暗号士でもね

(1.6)

79K: あの:

(1.0)

→80K: 師団司令部が(.)使う暗号はね:

(0.8)

81K: よん数字.

(0.6)

→82K: <いちに:さんし> (.) 四つ

83W: はい

84K: 数字やる(.)それからそのつ

(1.2)

→85K: 中隊で使うやら師団で使うやつは(.)だいたい <さん数字.>

86W: は:.

Kは間投助詞「ね」を用いて、「暗号士でもね」(78K)、「師団司令部が(.)使う暗号はね:」(80K)と段階的にコンテキストの情報を追加している。このとき間投助詞「ね」は、当該情報をコンテキスト中に確認・共有し、のちの参照可能性を示唆する「コンテキスト化の合図(contextualization cues)」(ガンパーズ1982)として機能している。

さらに、発話スピードを落としながら「<いちに:さんし> (.) 四つ」(82K)、「だいたい <さん数字.>」(85K)と発話する姿は、大人が子どもに、あるいは教師が生徒に教え論しているようにも見える。この現象は、非対称的な関係において、目上の者が目下の者へとスピーチスタイルを合わせる「下向き集中(downward convergence)」(Giles, Coupland & Coupland1991)だと考えられる。もちろん、Wが子どものような話し方をしているわけではない。ここで重要なのは、KがWのために自らのスタイルを調整しているという点にある。

これら二点の分析から、KはWの知識レベルに応じてスピーチスタイルを変化させ、Wへの配慮を示していることがわかる。と同時に、WとKの間には【知識を持たない者－知識を持つ者】という非対称的な関係性が成立している。この非対称性は、Kの発言権保有をいっそう強固なものとしている。

しかし、これをもって二人の関係が【非経験者－経験者】から完全に切り離された／切り替わったとは考えにくい。なぜなら、この間の会話においてもKは経験を継続的に語っているからである。また、【非経験者－経験者】【知識を持たない者－知識を持つ者】という二つの関係性は明確に線引きができるわけではなく、連続的なものであろう。この連続性は、会話データ冒頭の関係性【調査者－インフォーマント】にも言えることである。ここにいたるまでの三つの関係性、すなわち【調査者－インフォーマント】【非経験者－経験者】【知識を持たない者－知識を持つ者】は連続的であり、そのカテゴリー化の様相は関係性の〈変容〉というよりも、〈融解〉と呼んだほうが適切であろう。

ここで〈融解〉と言い換えたのは、〈変容〉では前述したような連続的な関係性を十全に捉えられないと考えたからである。Aという関係からBという関係へスイッチングするように切り替わり、関係性Aが消失あるいは後景化することであれば〈変容〉で問題ない。しかし、WとKの関係性は、そのようなわかりやすいものではないだろう。複数の関係性が、まるで仮面を付け替えるように個別に前景化／後景化するというよりは、その仮面が折り重なり、境界が不明瞭になって融け合っていると考えたほうが、二人の関係性を正確に記述できる。たとえ関係性Bが顕在化していても、そこには直前の関係性Aが入り込んでくる。このとき二人の関係性は、純粋なBでも、ましてや純粋なAでもなく、単純なB+Aでもない。経過の連続性（徐々にAからBへ）だけでなく、状態の連続性（複層的に溶け合っているAとB）を表すには〈融解〉が適切だと考えた。今後検討を重ねて洗練する必要はあるが、本稿では〈融解〉をキーワードの一つとして分析をすすめたい。

4.2 視点移動と時間の〈融解〉

WとKにおける関係性の〈融解〉を考えると、もう一つ重要な点がある。それは、自由直接話法と視点移動である。たとえば、(1)に続く会話（話題は変わらず鉄砲の話）において次のような発話がされている。

(4) 話法と視点移動

→55K: だから「ピュ:::ン」ちていうたら(,)「ははぁ:::。(,)h(,)何里先じゃな:」
ちいうて=

56W: =うん。

→57K: 「ヒュ:::ン」

(1.2)

→58K: 「はぁだいぶ遠いな:こりゃまだ。」

59W: うん.

Kは過去の経験を引用する際、二つの話法を効果的に用いている。まず一つ目が、「ちというたら」「ちいうて」(55K)のように引用標識や述語動詞を含む直接話法である。直接話法を用いることで、「ピュ:::ン」と音が鳴り響き、「ははぁ:::(.)h(.)何里先じゃな:」と思考する「あの時・あそこ」の「声 (voice)」(バフチン1963, Tannen1989)を「いま・ここ」に再現してみせている。砂川 (1987, 1988a, 1988b) の「場の二重性」を援用すれば、Kは「引用文そのものが発言される場」(=現在)と「引用文によって再現されている発言の場」(=過去)という二つの場を作り出し、それらの間で視点移動を行っていると考えられる。過去の登場人物－現在の語り手間の視点移動は、すなわち時間の往還を意味する。

ここにもう一つの話法が加わる。57K～58Kに見られる自由直接話法である。自由直接話法とは、「ヒュ:::ン」(1.2)「はぁだいぶ遠いな:こりゃまだ。」のように、引用標識などを用いず引用部のみを提示することを指す。そうすることで「会話の場面に物語の場を再現し、登場人物になり代わって演技する」(砂川2003)のである。直接話法が過去(登場人物)－現在(語り手)間の視点移動であるなら、自由直接話法は過去に滞在したままに行われる登場人物間の視点移動である。自由直接話法の機能は「発話の場への一元化」(砂川2003)であり、それにより臨場感を演出することができる。

これら二つの話法を使用することで、Kは時間の往還を効果的に達成している。そしてWとの関係同様、「あの時・あそこ」と「いま・ここ」との境界を〈融解〉させていく。

(5) 自由直接話法(「これ何時何時に送れよ」と直接話法(「はい」っちいうて)³⁾

→163K: 「これ何時何時に送れよ」(.)h「はい」っちいうてシャシャシャって打って(.) (　　すぐ電報早い)

164W: うん.

(6) 自由直接話法

203K: それから一時間ぐらい走って.

(1.2)

→204K: 「よし(.)小休止.

(0.8)

→205K: 今から

(1.8)

→206K: 敵の捕虜を.

(3.2)

→207K: 突く練習する」

(2.4)

208K: (はは柱へ) 行ったら.

(0.8)

209K: 捕虜

(1.2)

→210K: くくってる(.)「突け」 hhhh

時間の往還と〈融解〉は臨場感を生み出し、臨場感は時間の〈融解〉を促進する。この臨場感を支えるもう一つの演出方法が、過去を語る際の現在形、すなわち「歴史的現在形 (historical present)」の使用である。たとえば、上記(6)の209K～210Kにおいて、規範的な文法では「捕虜(を)くくって」と過去形を用いるところだが、Kは「くくって」という現在形を用いている。このような歴史的現在形は、物語世界に視点が移動していることを表し、臨場感を構成する機能をもつとされる(小玉2011)。

前述した二つの話法の使用と、この歴史的現在形の使用に共通することは、視点移動とその共有である。時間の〈融解〉には、この視点移動も影響していると考えられる。たとえば、前掲(4)のあとには(7)のような会話が続く。

(4) 話法と視点移動:再掲

→55K: だから「ピュ:::ン」ちていうたら(.)「ははあ:::.(.)h(.)何里先じゃな:」
ちいうて=

56W: =うん.

→57K: 「ピュ:::ン」

(1.2)

→58K: 「はあだいぶ遠いな:こりゃまだ。」

59W: うん.

(7) 【解説される者—解説する者】

60K: 弾を.

(1.0)

→61K: 弾がほら落ちる前に.

62W: うんうんうん=

→63K: =音が小さくなって「[[ピュ]::]」って(な)

64W: [うん.]

(0.6)

→65K: 音も小さいね?

66W: うん.

(1.6)

→67K: それで(.)だいたい(.)あの(.)行軍しても(.)敵が(.)近くにおる遠くにおるっ
ちゅうことを(.)[聞き]分け^o.

68W: [うん.]

Kは(7)において、直前までの視点移動先、つまり過去の情景をWに解説している。このとき(7)は直前の(4)に対してメタ言語的な役割を果たしているわけだが、興味深いのは、この(7)がどの時間軸で語られているのか、ということである。歴史的現在形の使用や、注意・行為を促す間投表現「ほら」(61K)から、過去に視点をそのまま「目の前」の情景にメタ的な説明を加えていると考えられる。その視点を共有することで、今度は【解説される者—解説する者】という関係性が顕在化している。当然、解説という行為の権限を持つのは「経験者」であり「知識を持つ者」である。こうした視点移動とその共有も、関係性の〈融解〉を支えたと考えられる。

4.3 複層的な対人関係と間主観性

ここまで関係性と時間の〈融解〉を見てきたが、これらの事象の意味するところは何であろうか。すなわち、Kは「語る」という行為によって、何を達成しているのだろうか。本節では、4.1と4.2での分析をもとに、ナラティブの語用論的機能について考察を加えておきたい。

ここで注目したいのは、Kは独白を続けて「ひとり相撲」をとっていたわけではない、ということである。Kの「語る」という行為には、あいづちとうなずきをくり返すもう一人の参与者、つまりWが大きく貢献している。Kによる視点移動や時間の往還も、会話の参与者であるWが承認しなければ成立しえない。このナラティブは、KとWとの共同構築によって成立し維持されているのである。その過程で行われる互いの視点取得や、それがもたらす共感⁴⁾は、参与者間に情報の共有をもたらす。しかし、その共有を完全に証明することは不可能だ。すなわち、二人にもたらされたのは「共有幻想」でしかない。こう考えると、Kのナラティブは、KとWが、Kの経験に関する情報を互いに共有していると思ひ込むプロセスそのものと捉えることができよう。

かつてシュッツは、社会とは様々な主観が織り成す「多元的現実 (multiple realities)」にはかならないと指摘した (シュッツ1945、1955)。彼はその例としてドン・キホーテの世界を挙げる。たしかに、あの「老騎士」と「従者」はそれぞれの主観的な世界で生きていると見てよいだろう。シュッツによれば、実のところ私たちの社会はこのような主観の集合体なのだという。しかし、不思議なことに、それでも社会は成立し、日常は滞ることな

く流れていく。この独我論的な世界が問題なく存立できるのは、自分の見ているこの世界が確かに存在し、目の前にいる他者も自分と同じようにこの世界を認識している、という確信のおかげである（フッサール1931）。

ナラティブは、この確信、つまり間主観性（intersubjectivity）の成立と維持に関わっていると考えられる。間主観性が、私たちの発達過程においていかに重要であるか、またコミュニケーションの成立、ひいては社会の成立にいかに重要であるかは多くの先行研究が示している。注目すべきは、トマセロ（1999）、Duranti（2009、2010）など、異なる分野の研究者が、間主観性の成立に寄与する重要な要素として視点取得を挙げている点だ。

今回のデータに立ち戻ってみれば、Kがナラティブを通して自らの主観的な物語を現前化する一方で、Wはそれに承認を与え、視点と時間軸を重ね合わせていた。かつてK青年が経験した「あの時・あそこ」を「いま・ここ」で共に経験することは、先行研究が指摘するように互いの間主観性の構築に寄与していると考えられる。

また、ナラティブは間主観性の構築と同時に、一時的にはあるが関係性の強化をもたらすものだと考えられる。下記(8)は、約12分間のナラティブが終結する直前に見られるやりとりである。

(8) 戦争のナラティブの終結前

(2.0)

232K: まそりゃ:ま:(.)微々たるもんですよ(.)その:話はね

233W: いやいやいや^o(いや)^o

→234K: いや(.)まだまだすごい話が=

→235W: =そうですね(.)[たしかにうん]

236K: [たくさんある(.)]あるんじゃがもう言いません[[hhhh]]hhhh

237W: [[hhhh]]

ここで注目したいのは、「まだまだすごい話がある」というKに、Wがまるでその内容を知っているかのように「たしかに」(235W)と応答している点だ。このWの発話は、それまでに視点取得と共感をくりかえし、間主観性が構築された結果だと考えられる。

こうして戦争のナラティブは終結し、KとWのやりとりは調査簿にもとづいた半構造化インタビューへと戻る。そして調査自体はその後、実に2時間以上も続く。Kは、突然訪問してきた初対面のWと長時間にわたり関係を継続させたうえ、K宅から宿に帰ろうとするWに、明日もまた顔を出すようにと声をかける。しかもその際、漁業語彙を調査するWの参考になればと大切な漁の道具（釣り針など）を分け与えたのである。ここに見られる関係の維持・強化は、ナラティブがもたらす効果の一つだろう。たしかに、言語そのものがすでに間主観的な存在であり、コミュニケーションそのものが関係維持・強化の機能（「交

感的」:phatic、Malinowski1923) を持っているが、ナラティブはそれをより促進するものと考えられる。

関係の強化について「一時的に」と断りをつけたのは、Kの抛って立つ「経験」「知識」「物語」が客観的な事実かどうかは確かめようがないからである。そうすると、二人の関係性(たとえば、【非経験者－経験者】)は常に無根拠性を孕んでいることになる。ナラティブを通して構築される対人関係は、脆く一時的な側面も持つのだろう。加えて言えば、ナラティブによって共感と関係性の強化がもたらされるとしても、それは完全な一致や理解をもたらすわけではないということである。たとえ視点を重ね、時間を共にし、共感でつながったとしても、Wは「経験者」=Kになることはできない。理解不可能性(=他者性)を完全に克服する存在は、もはや他者ではないのである。

5. おわりに

本稿では、当初築かれた【調査者－インフォーマント】という二人の関係性が、ナラティブを通してどのように変容するのかを記述し考察を加えた。その変容の過程は連続的であり、〈融解〉と呼ぶにふさわしいものであった。とはいえ、そこには連続性の中に解消しきれない、複数の関係性の層のようなもの(多元的現実)が存在するのだろう。複層的な関係とそれらが織り成す主観の交差は、互いの間主観性の構築に寄与していると考えられる。

結果として、本稿の目的はある程度達成することができた。目的①については、4.2で分析したように、話法の選択や歴史的現在形の使用、それらに伴う視点移動が時間の往還を可能にしていた。従来、これらの「演出」方法は個別に議論されており、ときには小説や作例を用いて分析されることもあった。本稿では、実際の会話データを用いて、多角的に記述し考察を加えることで、ナラティブの内実をより明らかにすることができた。

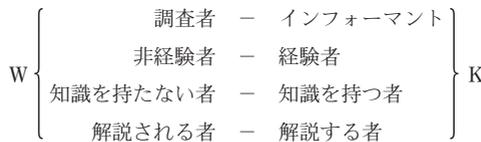
目的②については、4.1をはじめとして、WとKの複層的かつ連続的な関係性を記述し、詳細な過程を明らかにすることができた。実のところ、コミュニケーションとそれがもたらす関係性が動的なものであるという認識は、コミュニケーション研究ではもはや定着していると言ってもいいだろう。しかし、その動的な過程を実際の会話データによって明らかにする研究は少ない。言語学では皆無と言ってよいだろう。会話分析はその数少ない記述研究を行う領域の一つだが、2章で述べたような限界を抱えている。本稿はこれらの課題を克服するための一階梯として位置づけられるだろう。

また、すでに言及したように、先行研究でも視点取得や共感の延長上に間主観性を位置づける議論が散見される。しかし、これらも具体的な会話データと結び付けて記述されてきたわけではない。この点からも、本稿の意義を見出すことができるだろう。と同時に、間主観性に関して今後の課題も浮び上がってくる。もともと現象学に由来するこの概念は、

難解なうえにかなり抽象的であり、フッサール以降の議論も含め改めて精査する必要がある。近年、Duranti (2009, 2010) や片岡 (2011) など言語人類学において、問主観性の記述研究ともいうべき動きが出てきた。特にDurantiの「場の交換 (trading places)」という考え方は非常に興味深く、前述した「場の二重性」など本稿の議論にも有益だと思われる。一方で、時枝 (1941/2007) 以来、日本語研究においても「場」という概念は重要な位置を占めており、Durantiの言う“place”との整合性は不明である。これら様々な「場」については、稿を改めて整理をする必要があるだろう。

最後に、WとKにおける関係性の〈融解〉過程について、まとめておきたい。二人の間に立ち現れる一つ一つの関係性は、「一つ」と数えられるような静的で固定的なものではなく、動的で連続的なものであった。そうすると、「語り手 (話し手)」「聞き手」という役割も、またそれを付与される「自己」「主体」も連続性を帯びたものということになる。自己とは動的な関係性の束であり、様々な自己イメージを寄せ集めた一つの演劇的效果⁵⁾にすぎないのである (ゴフマン1959)。

つまり、ナラティブの参加者は、W-Kといった剥き出しの関係ではなく、常に何らかの関係性を帯びてしか存在できないと考えられる。このことを踏まえてWとKの関係性を図示すれば、以下になるだろう。



この図については、それぞれの関係性が同じ質・レベルにあるものなのかという検証も含め、今後洗練させていく必要があるだろう。また、私たちがなぜ「物語る欲望に取り憑かれた」ように語るのかについてもより考察を深めなくてはならない。前述したように、対人関係は脆く一時的な側面も持つと考えられる。これに起因する関係性への不安が、より強い関係性を欲する動機づけになっている可能性は十分に考えられる (辻2006)。今後は、関係性の構築や維持という観点だけでなく、瓦解 (脆さ) という観点からも、より詳細な記述と分析を行うことが必要だろう。

ただ、こうした事例を積み上げても、質的研究には一般化の問題がつきまとう。たしかに「科学」たらしめるには結果の普遍性が不可欠であり、その社会的な意義は非常に大きい。だが、筆者が明らかにしたいのは、数字では見えない生々しい生活世界 (life-world) であり、それは一般化できない特殊性を多く孕むものだ。コミュニケーションに関する質的研究 (たとえばエスノメソドロジーや会話分析) においては、こういった志向性は共通したものである⁶⁾。言語学からコミュニケーションを捉えようとする時にも、これらの問

題は大きなポイントになるはずだ。これまで以上に方法論の活性化が望まれる。

註

- 1) ナラティブの定義と具体的な事象は実に広範である。この点については野口編(2009)の「ナラティブは通常、「語り」または「物語」と訳され、「語る」という行為と「語られたもの」という行為の産物の両方を同時に含意する用語である。したがって、「語り」と訳すと「物語」という意味が抜け落ち、「物語」と訳すと「語り」という意味が抜け落ちてしまう心配がある。この両義性を示すために「物語り」という用語が使われることもあるが、書き言葉では区別できるが話し言葉ではともに「モノガタリ」となってしまう区別ができない。「語り」と「物語」という意味の両義性とその連続性をうまく表す日本語がないためカタカナ表記の「ナラティブ」が用いられる。」(pp.1-2)という説明が参考になる。この広範さと曖昧さの背景として、「語ること」を追究する学問領域が多岐にわたるといことが挙げられる。それはコミュニケーションにおいて「語ること」が普遍的な価値を持つ、ということでもあろう。一方で、事象全体を捉える定義の曖昧さはナラティブ研究の課題である。
- 2) もちろん、こうした併用は建設的な方法論と並行して行われるべきである。現時点では、「マルチメソッド(multimethod:多元的手法)」「トライアングレーション(triangulation:三角測量法)」(谷・芦田編2009、末田・田崎ほか編2011)などと呼ばれる方法に沿ったものだと考えている。
- 3) 判断が難しいが、163K「これ何時何時に送れよ」は自由直接話法、同行「はい」は直接話法だと解釈した。「これ何時～」の直後に何らかの引用標識を入れることは可能であるのに、Kがそれをしないことを重視した。
- 4) 視点取得と共感の関連性については、久野(1978)やデイヴィス(1994)などを参照。発達段階で見られる「共同注意(joint attention)」という現象からも、この二つの関連性の高さが窺える(トマセロ1999)。
- 5) ここでの議論の背景にあるのは、ゴフマンの相互行為論である。彼が用いた分析手法の一つは、日常(における相互行為)を演劇として捉えるというものだった(ドラマトゥルギー:dramaturgy)。彼によれば「自己」とは、どこかにそれとして実在するものではなく、数ある役=演技から生じる効果、すなわち演劇の効果(dramatic effect)の一つであるという。
- 6) 質的研究の考え方や志向するものについては、前田ほか編(2007)に詳しい。もちろん、エスノメソロジーの考え方や志向性が、あらゆる質的研究にあてはまるとは言えない。が、前掲書巻末の「コラム:よくある質問と答え」は、質的研究者であれば一度は質問されたことがあるだろう項目ばかりだ。執筆者たちの回答も社会学の一領域に留まらない内容となっていて、本稿の背景を理解していただくのに有益であろう。

参考文献

- バフチン, M. (1963) 『ドストエフスキーの詩学』(望月哲男・鈴木淳一訳1995) ちくま学芸文庫
デイヴィス, M.H. (1994) 『共感の社会心理学』(菊地章夫訳1999) 川島書店
Duranti, A. (2009) The Relevance of Husserl's Theory to Language Socialization. *Journal of Linguistic Anthropology* 19-2, pp.205-226.
———— (2010) Husserl, intersubjectivity and anthropology. *Anthropological Theory* 10-1, pp.1-20.

- Giles, H., Coupland, N. & Coupland, J. (1991) Accommodation theory: Communication, context, and consequence. In H. Giles, J. Coupland & N. Coupland (eds.) *Contexts of accommodation: developments in applied sociolinguistics*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.1-68.
- ゴフマン, E. (1959) 『行為と演技—日常生活における自己呈示』(石黒毅訳1974) 誠信書房
- ガンパーズ, J.J. (1982) 『認知と相互行為の社会言語学 ディスコース・ストラテジー』(井上逸兵・出原健一ほか訳2004) 松柏社
- ハリデー, M.A.K. & ハサン, R. (1976) 『テキストはどのように構成されるか—言語の結束性』(安藤真雄ほか訳1997) ひつじ書房
- フッサール, E. (1931) 『デカルトの省察』(浜渦辰二訳2001) 岩波文庫
- 菅野仁(2003) 『ジンメル・つながりの哲学』NHK出版
- 片岡邦好(2011) 「間主観性とマルチモダリティ—直示表現とジェスチャーによる仮想空間の談話的共有について—」『社会言語科学』14-1, pp.61-81.
- クラインマン, A. (1988) 『病いの語り—慢性の病いをめぐる臨床人類学』(江口重幸・五木田紳・上野豪志訳1996) 誠信書房
- 小玉安恵(2011) 「体験談における歴史的現在形の機能と視点」『日本語教育』148, pp.114-128.
- 久野暉(1978) 『談話の文法』大修館書店
- 串田秀也(2006) 『相互行為秩序と会話分析—「話し手」と「共-成員性」をめぐる参加の組織化』世界思想社
- Labov, W. (1972) *Language in the Inner City: Studies in the Black English Vernacular*. Philadelphia: The University of Pennsylvania Press.
- 前田泰樹・水川喜文・岡田光弘編(2007) 『エスノメソドロロジー 人びとの実践から学ぶ』新曜社
- Malinowski, B. (1923) *The Problem of Meaning in Primitive Language*. In C.K. Ogden. & I.A. Richards. (eds.) *The Meaning of Meaning: a study of the influence of language upon thought and of the science of symbolism*. London: Routledge & Kegan Paul, pp.296-336.
- 松木啓子(1999) 「語りのディスコース現象 社会行為としての言語使用再考」『言語』28-1, pp.40-46.
- 日本語記述文法研究会編(2003) 『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』くろしお出版
- 西阪仰(2001) 『心と行為』岩波書店
- 野家啓一(2005) 『物語の哲学』岩波現代文庫
- 野口裕二編(2009) 『ナラティブ・アプローチ』勁草書房
- Sacks, H. (1992) *Lectures on Conversation*. vol.2. Oxford: Basil Blackwell.
- 桜井厚(2002) 『インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方』せりか書房
- 佐藤彰・秦かおり編(2013) 『ナラティブ研究の最前線—人は語ることで何をなすのか』ひつじ書房
- シュッツ, A. (1945) 「多元的現実について」『アルフレッド・シュッツ著作集第2巻 社会的現実の問題II』(渡部光・那須壽・西原和久訳1985) マルジュ社, pp.9-80.
- (1955) 「ドン・キホーテと現実の問題」『現象学的社会学の応用』(中野卓監修・桜井厚訳1980) 御茶の水書房, pp.70-106.
- Shiffarin, D. (1987) *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 末田清子・田崎勝也・猿橋順子・抱井尚子編(2011) 『コミュニケーション研究法』ナカニシヤ出版
- 砂川有里子(1987) 「引用文の構造と機能—引用文の3つの類型について—」『文藝言語研究 言語篇』13, pp.73-91.

- (1988a) 「引用文の構造と機能 (その2) —引用句と名詞句をめぐって—」『文藝言語研究 言語篇』14, pp.75-91.
- (1988b) 「引用文における場の二重性について」『日本語学』7-9, pp.14-29.
- (2003) 「話法における主観表現」北原保雄編『朝倉日本語講座5 文法I』, pp.128-155.
- 谷富夫・芦田哲郎編(2009)『よくわかる質的社会調査 技法編』ミネルヴァ書房
- Tannen, D. (1989) *Talking voices: Repetition, dialogue, and imagery in conversational discourse*.
Cambridge: Cambridge University Press.
- 時枝誠記(1941/2007)『国語学原論』(上下巻) 岩波文庫
- トマセロ, M. (1999) 『心とことばの起源を探る 文化と認知』(大堀壽夫ほか訳2006) 勁草書房
- 辻大介(2006) 「つながりの不安と携帯メール」『関西大学社会学部紀要』37-2, pp.43-52.

〔付記〕

本稿は広島大学国語国文学会平成25年度研究会(平成25年7月6日)での口頭発表(「ナラティブによる対人関係構築」)を修正・加筆のうえ改題したものである。発表の席上で、また発表後に多くの方々から有益なご意見を賜った。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

—わき・ただゆき、福山大学講師—